『ぺらっとふぇす2022夏』参加作品
作：燐果（@hazy_palemoon）
製作：燐灯書庫
https://phosphorescence.net

着地点

小学生の頃、紙飛行機を作るのが好きだった。

学校中のいらない紙をもらい集めて、休み時間の度に飛行機を作った。

尖った飛行機や平たい飛行機、翼の大きい飛行機、頭の重い飛行機、回りながら飛ぶ飛行機……、折った飛行機を持てる限り握りしめ、僕は校庭で一番高いジャングルジムへ上るのだ。遠い地面と平行に構え、腕を引き、前方へ送り出し、手放す。それは各々の翼で各々の風に乗り、飛んだ。

遠くへ、もっと遠くへ。

頭を掻きむしって、飛行機を作り続けた。

僕は「変わった子」だったといえる。親を含め周囲の大人は自分自身のことにしか興味を持っていない様子だったし、同級生もまた、黙々と飛行機を飛ばす僕のことが見えていないようだったから、僕はさらに飛行機を作ることに没頭できた。

友達と呼べる人間はいなかったが、友達と呼べる本は沢山あった。飛行機に関する本は物理の教本から星の王子様まで読んだ。睡眠をとり、食糧を食べ、排泄し、飛行機を作って飛ばす。僕はそういう動物だった。

月面サイトM滑走路。

後輩のサン=Ｊが流行りのフィット型宇宙服で手を振りながらやってくる。僕のヘルメットに彼の声が響く。「帰省日和ですね」

青い地球を背景に、僕の設計した紙飛行機形のシャトルは、人々と機材を次々に飲み込んでいる。やっとこの日が来た。

凄まじい気候変動のせいで人類は、存亡をかけて月に避難した。以来僕は、専門家チームと共に問題の解決を考えてきたのだ。

「あぁ、早くあそこで飛行機を飛ばせるようになりたいよ」

僕は呟いて白髪を掻き、帰省先を眺めている。